

するのである。「おもく開きぬ」は、主観的な云ひ方であるが、所謂牡丹の特長を巧妙に現はし得た句法である。

しりぞきて病にこもる吾にさへするどく迫る世さがは思ほゆる

世帯苦勞を離れて病に身を養つてゐる吾にすら鋭く世相のさまが迫つて思はれる。「松蟬」三首中の一首である。昭和七年の五・一五事件突發の世上は、病に籠る作者の神経をも苛立たしめたのであつた。『磯山に松蟬鳴けば吾が病癒えむ日待ちてこころ苛だつ』當時の作者の心持がこの自然詠の中に如實に現はれてゐる。このころ作歌數は尠くなつて行つたが、病と闘ふ作者の意氣込みは、言々句々の中に沁みわたり、ますます歌境は澄み入つて來た。

家ゆるする風をし聞けば山かひは遠きそらよ

り木がらし來る

家を搖すつて吹く風の音は、山峽へ遠い空から吹いてくる木枯である。「病床秋雨」五首中の一首である。五日市の海邊から、十月郷里布野村へ歸つて來た折の歌である。「遠きそらより木がらし來る」の句法などは、一峽村の生活を懷かしむ人の經驗から自ら句を成したと云へるのである。『雨さむく日ならば臥せば疊にはひるをねずみの音なくて出づ』このやうな題材の歌も、森閑とした山峽の生活が窺はれて妙に寂しさをそるのである。このやうな作爲のない平凡の歌もなかなかいい。

去年のごと禍津日あるなテロリズム世を暗
うするは國がらに恥づ

去年のやうな禍ひの日は又とこの年にあるな、暴力主義は世の中を暗くす

る。まつたく國柄に恥づべき事だ。五一五事件に刺戟されて詠んだ歌である。「歳首有感」七首中の一首である。山峽の村に靜かに病を養ふ人の生活にも、世の波は寄せて、臥床の人も、ただならぬ心の動搖を覺えたのである。『さがしかる世相にあへてきはねど去年も今年も病めば嘆かゆ』このごろの世相の騒がしさは知つてをるが、敢てその世相に競はうと自分はいらない、ただ、去年も今年も病んでゐるのが嘆かはい、と云ふのであるが、暴力主義は國柄に恥ぢると云ふ感慨は、世相が作者の心を強く刺戟したからである。

いたつきに老いゆくらむか口ひげに白鬚生
ひそめておとろへにける

病氣のために老いゆくのであらうか口髭に白鬚が生ひはじめて衰へを知つた。「冬朝病床盥漱」五首中の一首である。作者この時、四十五歳であるから、老いづくには早いのだが、病氣は、老いを早く感じさせたのである。赤彦の晩

年の作に、『山深く起き伏して思ふ口鬚の白くなるまで歌をよみにし』と思ひ合せられる歌である。年齢を思へば、作者の「老いゆくらむ」は一面消極的な感動ともとれるのであるが、藝術家の常の製作苦勞から來る斷間ない感覺の活動は、外形靜謐のやうであるが、争闘に等しい内生活が續けられてゐるのであつて、つまり歌はれたものは靜かであらうとも、一種の平靜たり得ないものが作歌の外邊を取巻いてゐるのである。短歌の形式は、事實多くの取材を一首の上に現はし切れないのである。ほとんど一部の感情の表現に止まる、しかるに看方によつて作者の全的な生活が知られるのである。作者は作歌苦勞を幾年か重ねて、自身の衰へを詠歎せずにはゐられない衝動にかられたのであらう。

ふゆ海の景色も窓によく見ねば顔あらひ了へて
ただに臥すなり
した濱の打ちたて牡蠣はうまけれど病みては食
の減りしこのごろ

騒がしい世相を、この歌でみると、すっかり忘れてゐるかのやうな静かな歌である。病氣と争ふ自己の姿のみしか、この歌から感じられない。ここまでは歌が清純な相になつて來た事を恐れるのである。この恐れると云ふ氣持は、恐らく作者の歿後に於ける人々の感想かも知れぬが、作者は、歌のしづかさの上に現はれる自分を、餘りにもよく知り過ぎてゐたのかも知れない。

あづまよりはるか來給ひし君と居てこの三

日間は實にみじかし

東國から遙々と來られた君とあるこの三日間は實に日の經つのが早い。

「四月十一日齋藤兄見訪」とある二首中の一首である。この歌の前に、

この宵を海に音なく似島に水氣をふふむ月上り
けり

五日市古濱の假寓からみた海上の月を歌つてゐるが、これが齋藤茂吉氏と

の最後の會見となつたのである。友情を作歌の上に現はすべく作者の細心な思ひ遣りは、淡々として靜かな歌境を窺めつつあるかのやうである。幾日も友と語りたいたいが、すでに宿を去らうとする友の前に、「この三日間は實にみじかし」であつた。旅行の途上にある友を、さう永く引留められない氣持である。友の氣持を全部理解の出來てゐる作者であつたればこそ、敢てかう云ふ詠歎をして悔いを感じなかつたと思ふ。作歌上の實行となれば相競ふ友であるが、心の全部を出して勵み合つた昔の藝術上の興奮を想へば、作者の所謂肝むかふ心の友と親しむ感情を現はさずにはをられなかつた。

ふるさとへ歸る長路にいり行かむ山がうれ

しも行く手にあをく

ふるさとへ歸るべく長路へ入つて行かう、行く手に見える山が青くてうれ
しい。「七月七日炎暑歸郷旅途十一首中の一詩である。五日市から故郷の布

野村へ歸る途すがらの歌である。歸郷旅途の一聯はすべて自動車車中吟であるが、病者の眼に映るものの相は、深緑の世界であつた。見るものすべて心の對照となり、常には何心なく看過ぐしてしまふ道中の物象に、新しい感覺の蘇へると共に、表現欲の湧くを覺えたのであらう。「山がうれしも」は故郷に近づく懐かしさである。「行く手にあをく」と視覺に訴へる句法は、概念的な感じが伴ふが、とにかくこの歌の表現上の妙味は、自覺した作者の心眼がはつきりと實相を寫し得てゐるからよいのである。この歸郷吟が、布野村へ再び訪れることのない、最後の旅行吟となつてゐるのである。

いきほひて濁りなみだつ峽の川なほ谿おくは降り續げるらむ

ゆふだちは上根の嶺のうらおもて四五里やふり

し道の濡れたる

日常語る中に出てくる言語を、そのままに歌詞としたやうなところがある。誰人でもかう云ふ感じ方でありさうだと云ふ觀念が與へられるのである。

作者は、作歌意識をはつきりと感じながら自然の現象に接してゐるのである。事象の一部分を詠んだ歌であるが、土地柄といふものがはつきりと眼に浮んでくるのである。題材の新奇ではなくて、心持の新鮮味である。それは、かつての作歌苦勞の賜と云はねばならぬ。芭蕉の俳諧、旅中吟などを參考として作者のこれらの歌を味ふと意義深いものが發見できるであらう。

ふるさとに病む身かへりて心やすしあを田

夏山臥てゐても見ゆ

故郷の家に病身の自分は歸つて來て心は安んじてゐられる、さうして稻田の青いいと、夏山の青さも臥しながら見てゐる。「清夏歸居吟」七首中の一首である。半年ぶりで眺める故山の姿であつた。海岸に轉地療養につとめた作者の眼に、漠然と眺める故郷の山の景色ではあるが、心安らかに眼を向けられる自然の美しさであつた。さうして作者は、ひたすら病氣の自身を省みる

静かさに浸り得られた。

梅雨を経てくろむ山にうぐひすのいまだ老い

ぬをかへり来てきく

戸開かければほしいままなる朝ざりはやまひの床

のうへを吹きすぐ

歌風が陰氣でなく、むしろ明るすぎるほどである。かう云ふ點が子規の病床吟と通ずるものがある。『つねは人の居ぬに馴れしかせきれいは部屋へぬけてあゆむ恐れ氣もなく』かう云ふ歌には、森閑とした作者の身邊の空氣が自然と表現されてゐて、まさに自然に同化した作者の姿と云はうか。

朝虹は野分はげしき西の山にしばし立ちしが雲吹き消ちぬ

朝虹が野分のはげしく吹いた西の山に少しの間立つてゐたが、忽ち雲が出

て吹き消して了つた。「九月四日颱風襲來して翌日につづく七首中の一首である。朝虹が、西山に立つたと云ふ句法には、一種の對立的な理りがあるが、作歌上の工夫はかう云ふところに於いて少しも不自然にならしめてゐない。

吹きみだれ伏せる稻田の出穂でほのうへに今朝もはげしく降りあまる雨

稻田の出穂に降りそそぐ雨の音がこの歌から聞えてくるやうだ。作歌上、誰人も氣の付く自然の情景でありながら、かういふ風には表現しきれないのである。繪畫的な着想などと云ふ境地を通り越して、自然に參入する人の姿である。

なほ暴るる雲のゆききや蟬のこゑ今朝うら山にひたと熄やみたる

颱風が襲來して空には雲の活動が烈しくなつて夏山に啼く蟬の聲が熄やむと云ふ、當然さうあるべき状態をありのままに現はしてゐるのだが、歌詞の運用は、心ゆくまで作者の身に着いて生々と妙味を發揮してゐるのである。

山ざとに秋を早目に刈る稲はいま度もあをし露しとどなる

山里に秋となつて早目に刈り取る稲は、いまだ青くてその上に露が一杯たまつてゐる。「山峽秋景」四首中の一首である。小品的な歌柄ではあるが、作者にとつてもつとも得意とする自然詠である。まとまつた句法の歌でありながらそのまとまりを流動せしめてゐるのは、刈られた稲が青いと云ふ観察である。ましてや、その稲が露に濡れてゐると云ふ清しい手法に、ただ氣品の高さを思はしめずにはゐない。

今朝の秋になにを撃ちたる銃おとか峽にとよみて音大きなる

「今朝の秋」と云ふ文句は、特に秋の季節を現はすことに成功してゐる手法である。秋の朝ではだめなのである。これらは、非常に大切な歌の妙味なのである。つまり秋の氣の満ちる山峽にこだまして銃の音が聞えたのであつて、作者は思はずその音に耳を欬てたのである。「なにを撃ちたる」は、鳥であるのか、獸類であるのか、そこをはつきりと想像してゐないが、亢奮的な詞句である。鳥を撃ちたると云つて了へば、銃おとかが調が張つて來ないのである。

うたかたと命をいへどこの世より去らすべからぬ人を死なしぬ

人の命は水泡の如くと云ふが、現世より去らしてはならない人を死なしめた。「悼平福百穂畫伯」八首中の一首である。病床にある身もちぎれるやうな悲しみに、作者は甘んじて遭遇しようとしてゐる。作者は、かつて、肉身の人々の死去に遭遇する事が度々あつた。それでゐながらその人々を悼む歌を多く詠んでゐないのである。主として作者の肉身の人々との離別の悲しみは自然詠にそそがれて、露骨な哀悼歌はあまりに尠いのである。作者の歌の進

境をかへりみるのに、單に技巧の苦心ばかりではなく、多くの悲しみの體驗から來たものが土臺となつてゐる。作者には、年とつた兩親が健在なのである。しかるに兄妹の死を経験してゐるのである。いままで作者の作歌を鑑賞して來たが、この事にはつひ觸れなかつたが、常に作者の歌を味ふ上に、心に感じてゐた事なのである。平福畫伯を悼む歌を讀んで、以上のやうな感慨を覺えたのである。

をさなきより父亡き君は兄ぎみを仰ぎたまひき

死して殉ふ

病むわれをねむると見らめ床のなかに君をなげ

きて聲吞むときに

絶対に信賴する人を悼む歌として、ここまで歎き悲しまれた、作者の心をむしる羨むものである。兄君の死を知つて急遽秋田へ發つた百穂畫伯は、悲しみのあまり兄君に殉死された感を世上の人に與へた。かう云ふ點が憲吉の氣質の上にも交流してゐたのである。

雨いたく冬かみ鳴りのとどろくや今宵四方

山おち葉つくさむ

雨が甚しく降つてゐて冬の雷鳴が轟く今宵は、四方山の木々の黄葉も落ち散つて了ふであらう。「裏山しぐれ」六首中の一首である。「雨いたく」と云つて降るを省略してゐる句法や、「おち葉つくさむ」と云ふ句法の上には、ある詞足らずの感がないでもないが、なかなか手堅い技法と思ふのである。調子の力強さの點になれば、病者の歌ではなく、あきらかに健康者を凌ぐものがありはしまいか。しかしながら、作者の作歌意識には、必しも健康體の歌を豫想してゐなかつたであらう。眼の前に立ち現はれた自然の現象に憚ることなく技法を驅使したと云つても過言ではない。

日の御子の天降り車のみ音かも冬かみなり

の轟くこれは

日の皇子の天より降りたまふ御車の音である、冬雷のいま轟くのは。「國土
新に光る」八首中の一首である。詞書に『臘月御生誕せまりて冬雷降雪その
吉兆あり』とあつて、昭和八年十二月二十五日皇太子殿下御降誕の喜びを詠
んだ歌である。

この國は日繼の皇子の定まりて天のしたなるい
や榮のくに

この歌の内容を補足して解釋すれば、ほがらかに明け渡る空を仰いで國柄
を讚へた、萬葉調を基底とした、所謂皇國の歌なのである。形式的には類歌が
あるやうだが、萬葉の「天地の榮ゆる時に」などの句法が聯想されてさう思はれ
るのかも知れぬ。だがこの前の歌「冬かみなりの轟くこれは」の非凡さは、認む
るにあまりある佳句であると思ふ。

昭和八年十二月尾道市千光寺公園の假寓に移つた作者は、翌年の五月まで
静養に勉めたが、そのしるしはなかつた。この千光寺公園は海拔五百尺に足
らぬ山の上にあつた。三百八十幾段の石段を一段づつ徒歩で作者は登りつ
めたのであつた。

歳旦雜感

病み臥せば吾に正月のかかはりなく今日はきの
ふの續きのごとし

新春の雪

ふかぶかと庭木の雪を散らしつつ山小鳥ゐてい
ろ美しき

窓前

病む室の窓の枯木の櫻さへ枝つやぶきて春はせ
まりぬ

平福畫伯を悲しむ

吾が病癒えなばゆきて奥津城に居給ふ君をゆり
てもおこさむ

昭和九年には、以上のやうな歌が發表されてゐる。病氣を悲しむ心ではな
くて、人の死を悼み、新春の雪を讃へ、櫻の枝の艶づいてきた春の季節を歌つた
平淡の中に深く住した作者の姿である。平淡と云ふ言葉はかつてこの作者
が、『しがらみ』の編輯雜記で『今の予の人生に於ける願望は極めて平淡である』
と使つてゐた事を思ひ出すのである。

中村憲吉氏に就いて

中村憲吉氏の短歌を鑑賞するに當りまして、大體の經歷と、歌壇的位置を敘
述せねばなりません。憲吉氏は、明治二十三年一月、廣島縣雙三郡布野村に生
れ、家は造酒業でありました。東京帝國大學法科大學經濟科を出で、家業に従
事、大正十年より昭和元年まで、大阪毎日新聞社經濟部記者として關西地方に
活動、後郷里に歸り家業に専心携はる事になりました。

明治四十一年、二十歳鹿兒島高等學校學生時代、始めてアララギを主宰する
伊藤左千夫先生を知り、以後左千夫先生に師事して、正岡子規氏の歌風に傾倒
するやうになりました。堀内卓造氏は、高等學校時代、短歌愛好の道に導いた
先進として、憲吉氏は尠からざる影響を蒙つたのであります。堀内氏は二十
三歳で夭折しましたが、憲吉氏の所謂『私の今迄の生涯を通じて、頗るふかい
影響を與へた友人である』であつたのです。憲吉氏は、アララギへ短歌を發

表すると同時に、多くの良い友を得ました。大正二年(二十五歳)に久保田柿の村人(後の島木赤彦)との合著歌集「馬鈴薯の花」を發行いたしました。この年に左千夫先生は逝去されましたが、アララギの若手同人は、一齊に立つて、アララギと云ふ集團のために、作歌上の勉強とあひ俟つて、將來へのかためを強くいたしました。東京に於ける憲吉氏の學生時代は、かうしたアララギの活動期の渦中に入つて作歌方面に力をそそぐ事が出来ました。

大正三年は島木赤彦氏が上京、共にアララギの編輯に従ひ、萬葉集短歌論講に加はつてをります。大正五年(二十八歳)に第二歌集「林泉集」を出版。この年の前年結婚されて、一時東京生活を志し、就職口を求めましたが思はしからず、郷里に歸住する事になりました。第三歌集「しがらみ」の發行されたのは、大正十三年七月であります。憲吉氏三十六歳の時です。大正十二年の秋關東大震災がありました。偶、大阪毎日新聞社の經濟部記者として重大な社會的任務を果したのは、特記に價する事實であります。大正十四年に自選歌集「松の芽」を出版。大正十五年(昭和元年)の三月に畏友島木赤彦の逝去にあひ、間もなく

大阪毎日新聞社を退いてをります。故郷の家督を相續したのはこの年の三月でありました。

昭和五年(四十三歳)の七月に第四歌集「輕雷集」を出版、この月の初めから微恙、この微恙が舊に復さず、廣島市外五日市町古濱に轉居、一時歸村したりして靜養に努めました。再び故郷を離れて、昭和八年十二月尾道市千光寺公園の假寓に移り、安靜を保たれたのであります。昭和九年五月、つひにこの假寓に在つて不歸の客となりました。行年四十六歳であります。歿後の歌集「輕雷集」以後は、土屋文明氏の編輯に依つて、昭和九年十一月に發行されてをります。齋藤茂吉氏はこの書の序文で、『憲吉君の歌風は本邦和歌史の上に獨特の地步を占めること愈確實となつた』と云はれてをります。ついで「中村憲吉全集」全四卷は昭和十二年十月に發行、十三年十月に完結されました。

兩親は御健在であります。兄弟運にはあまり恵まれない境遇にありました。壯年に至つても、うら若い弟君と、妹君を失つてをります。しかるに憲吉氏の歌には、肉身の不幸を歌はれた歌があまり多くないと云ふ事實です。多

く自然詠に心を深められた結果でありませう。たまたま挽歌があると致しましても、自然、及その他の他の人事に心を集めて、不幸の悲しみはあまり歌の上で強調しないやうであります。寫生を信念とする、客觀的の強味とでも申しませうか。

先進、あるひは周囲の影響もありまして、憲吉氏の作歌態度は、峻嚴で純粹であると云ふ印象を、歌壇人に與へました。氏はかつて「しがらみ」の編輯雜記の上で

今の予の人生に於ける願望は極めて平淡である。作歌の生活は最早今は、予の生命から取り離せぬものとなつて居るとしても、それ以外の實生活について、予には別に通常人のそれと殊異な生活に居らうと云ふ望はない。

かやうに述べてをります。これは大阪毎日新聞記者生活時代の、感想の一端として擧げられます。社會に處する憲吉氏の根本的な考へは、山間の一小村に將來は落著かねばならぬと謂ふ一事にあつたやうです。物質上の安

定によつて、ゆとりのある眼をもつて周囲を眺められた憲吉氏にとつて、作歌によつて糧を得ようとする藝術家らしい野望は、微塵だになかつたことは事實であります。しかしながら、憲吉氏の歌壇的位置を考へるとき、作者は所謂作歌者の全生活態度をもつて一貫してをりましたので、作歌上の信念が、實生活の上にくひ込んで、どうしても切り離しては考へられぬものとなつてゐました。従つて憲吉氏の實生活の苦勞と、作歌上の苦勞は一體となつて、作品の背後に現はれずにはゐなかつたのであります。歌境の高さを狙ふ要求のためには、憲吉氏は身を賭して藝術境に參入したと云つても過言でないのです。

憲吉氏の歌の多くは、連作體のものから發展してをります。さうして大體始めがあつて終のある連作態度が感じられます。連作と云つても、各首の上に獨立した價值があり、前人未發の境地まで歌を引き上げた作品が多いのであります。憲吉氏の短歌の基調は、萬葉調であります。萬葉集に出入して自己を極めたところに、憲吉調の本領があるのです。近代思想の特長として、短

歌の方面に於いても歌境の上に心理的の現れは著しくなつてきて素朴、端的な萬葉集の歌とは、はるかに内容のへだたりを感じさせられます。就中、憲吉氏の作品には、所謂心理的の要素がたぶんに加はり、修練に修練を重ねた技法上の苦心が、丹念に實行されてをります。さうして心理的な歌の内容をもつて、萬葉集の歌へ肉迫してゐるかのやうであります。

憲吉氏は、拙修と云ふ言葉によつて、自己の歌の道に於ける精進の跡を省みてをるやうですが、大巧は拙なるが如しの言も、憲吉氏の歌を考へる上に参考となりませう。現代の歌人の中にあつて、憲吉氏ほど潤澤な詞句を驅使する人を鮮しとします。文章の上にもこの持味が感じられます。この持味によつて表現された短歌は、平淡で純美、かつ醇厚の歌もあつて、古今稀なる歌の氣品を創造してをります。

憲吉氏の歌と、赤彦氏の歌とが、歌道の本道をゆくものであるとする見解は、兩者歿後の歌壇人へ等しく與へた感懐でありまして、永遠に不滅な存在と云へる譯です。短歌を學ぼうとする人は、どうしても憲吉氏の歌風を檢討する

用意が必要であります。今後憲吉氏の歌風に傾倒する作歌愛好者の増加によつて、益、短歌道の發展が促されるものと信ずるものであります。

平福晝伯、島木赤彦氏は憲吉氏のもつとも信頼した友でありました。藝術上互に承け合つた影響は頗る大きいと思ひます。赤彦氏の歌風の堅實と、憲吉氏の歌風の瀟洒は、自他共にゆるした特色であります。平福晝伯の晝境は、これ又憲吉氏の敬つた偉大な對象であります。晝伯としても憲吉氏の歌境より承けた影響は、鮮くないと思はれます。かう云ふ優れた二人の友を、憲吉氏は生前失つてゐるのであります。さうして自己は、その兩者の年齢へも至らずして病歿されたのです。この二人の藝術家を對象として練磨研鑽を幾年となく重ねられ、藝術的向上があつたと云つても過言ではありません。赤彦氏歿後の憲吉氏の作品には、一層心理的な深味が加はつたやうであります。憲吉氏の諸歌集をつぶさに研究してみますれば、この關係を明らかにする事が出来ます。平福晝伯の死に接するや、身も心も悲しみに浸つた感じがありまして、つひに憲吉氏の創造しようとする歌境を、永く引きとめませんでした。

平福畫伯は、愛兄の死を悲しむあまり、その悲しみに殉ぜられました。憲吉氏は畫伯の死を悲しむあまり、思ひ切り悲しみを露骨あからにして、敢て悔いを感じようとは致しませんでした。世に稀にみる人情の交流には、ただただ頭の下がる思ひがいたします。

憲吉氏の作品の不滅の光りに輝く所以は、かうした人情味と實世間に處する態度の眞劍そのものであつた爲であります。昭和六年に發表した隨筆文の一節に、

眞に一體として纏つた人生の相は、都會よりも、却つて田舎に於て、ふかく正しく見得られるのではあるまいか。

かやうに云はれてをります。憲吉氏の眞實味は、田舎の農民生活への同情となつて作品の裏に潜んでゐるのではないかと解せられます。とりもなほさず、人と人との日常の交流に重きをおかれ、そこに憲吉氏の博大な心持は活動してゐたやうに思はれます。

索引

凡例

- 一、この初句索引は、本書に引用された中村憲吉の短歌のみに限った。
- 二、排列の順序は五十音順によった。
- 三、見出語は假名に改めなかつたが、二首以上同じ初句が異文字によつて書かれてゐる場合は假名に改めた。その場合に限り第二句を挙げた。例へば

やまのうへは

天にちかけれ

ほがらに晴れし

輕

一〇八

輕

一一三

の如くである。

一、「林」「し」「輕」「以」等の略語は歌集を示す。

林……林泉集

し……しがらみ

輕……輕雷集

以……輕雷集以後

あかときの 赤羅 <small>あから</small> ひく	林	一〇六	阿蘇山へ あづまより	以	一〇九	いさほひて	以	一〇六
秋ざれば	し	一〇七	淡路の	輕	一一〇	池の向うに	輕	一一〇
秋づけば	し	一〇八	阿波の海に	輕	一一一	磯湖 <small>いそほ</small> の	林	一一一
秋の空に	し	一〇九	遭ふ船の	輕	一一二	磯 <small>いそ</small> の	林	一一二
秋ふかき	以	一一〇	雨霧の	以	一一三	磯山 <small>いそやま</small> に	以	一一三
朝あさの	輕	一一一	天つ霧	輕	一一四	いたつきに	以	一一四
朝がすみ	輕	一一二	天つ日の	輕	一一五	いとまなき	輕	一一五
朝づく日	輕	一一三	網船に	輕	一一六	人もあそびて	輕	一一六
朝照らふ	輕	一一四	雨いたく	以	一一七	我はきたりて	輕	一一七
朝なあさな	輕	一一五	雨かぜの	以	一一八	いななかず	林	一一八
朝虹は	以	一一六	雨さむく	以	一一九	いねがたき	輕	一一九
朝庭は	輕	一一七	雨にぬれ	輕	一二〇	福良 <small>ふくら</small> の夜半に	輕	一二〇
朝まだき	輕	一一八	雨ふかき	輕	一二一	夜をなやみぬ	林	一二一
朝ゆふの	輕	一一九	雨漏りて	輕	一二二	岩かげの	林	一二二
明日よりは	し	一二〇	青き露	林	一二三	家うらに	以	一二三
阿蘇びとは	以	一二一	青山の	輕	一二四	家ならぶ	以	一二四
						家のうちへ	以	一二五
						家かする	以	一二六
						入りつ日は	以	一二六

高田浪吉著
歌人赤彦の鑑賞

四六判・和紙装・二八二頁
定價一圓八十錢 送料十錢

赤彦は歌聖人麿、赤人に比肩する大作家。説くところの短歌寫生論は東西藝術論の精髓、歌道の指針。萬葉集を尊重し子規の歌風を繼承してアララギ派の隆盛を來たさしめた偉業は短歌史上永遠に没すべからざるものである。著者は赤彦の高弟にして現アララギの中堅作家。作歌生活に生涯を賭した赤彦を語るものとして最適の人である。本書は短歌を學ぶ者、赤彦の歌を愛するものにとりて無二の師友であり赤彦研究の定本たるべき名篇である。

三 省 堂 刊

H-553

高田浪吉編
短歌鑑賞讀本

四六判・上製・三六八頁
定價二圓 送料十錢

著者はアララギ派の中堅作家、その透徹せる作家的信念は一貫して選歌の上に現れ、本書をして優れたる秀歌集たらしめた。記紀、萬葉より子規、左千夫、節に至る迄のすべての歌人歌集の精髓千三百餘首は何れとして吾人の詩趣を咬り共感を呼ばざるはなく、正に一般短歌愛好家、作者、學生諸氏の最も適切な教科書なりと確信する。又歌集解題、語釋索引等の完備も本書のみが誇りうる一大特色である。

三 省 堂 刊

H-519

エ4079

石 樽 茂 著

現代人の短歌のつくり方 増訂版

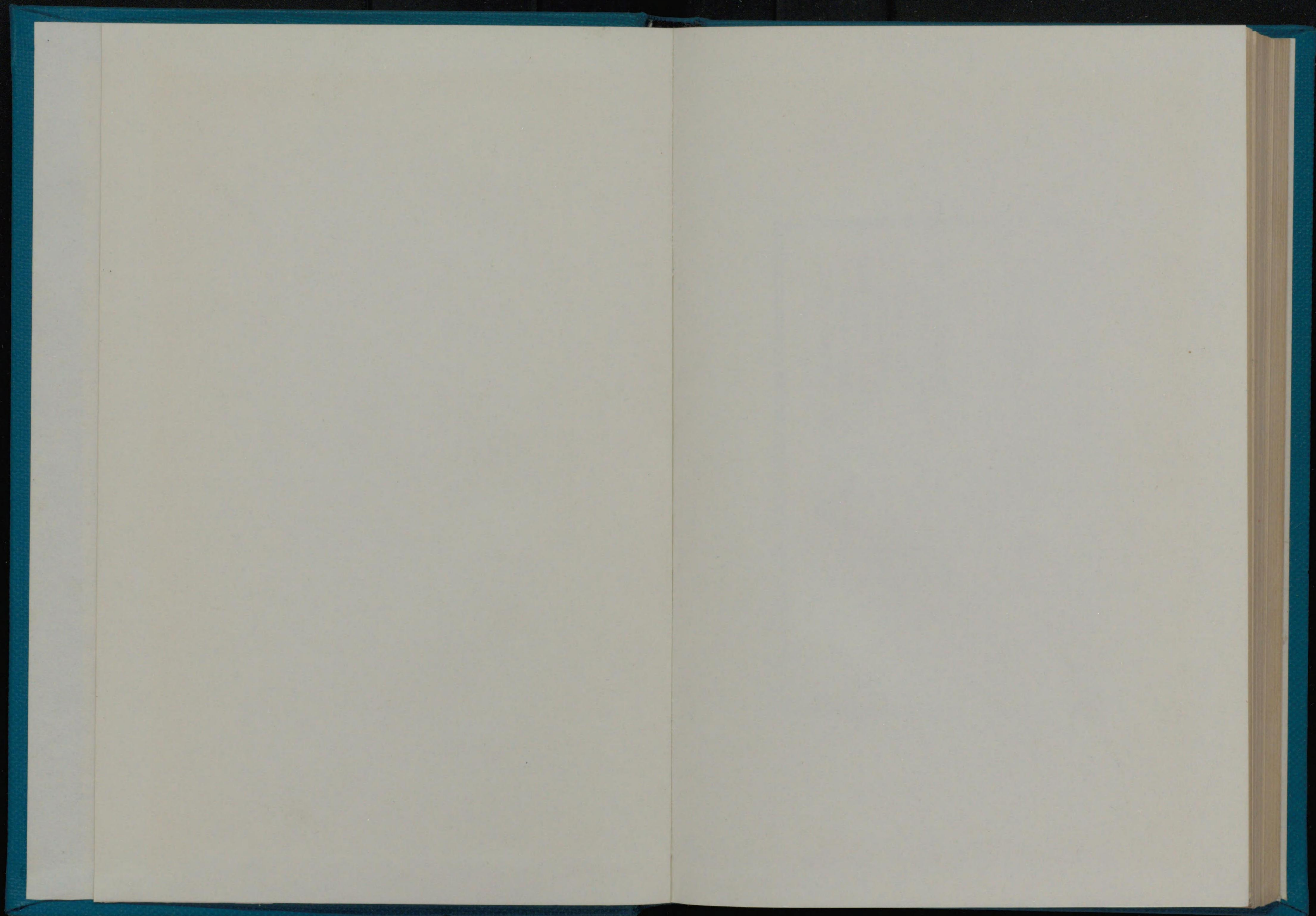
四六判・フランス綴・一六二頁

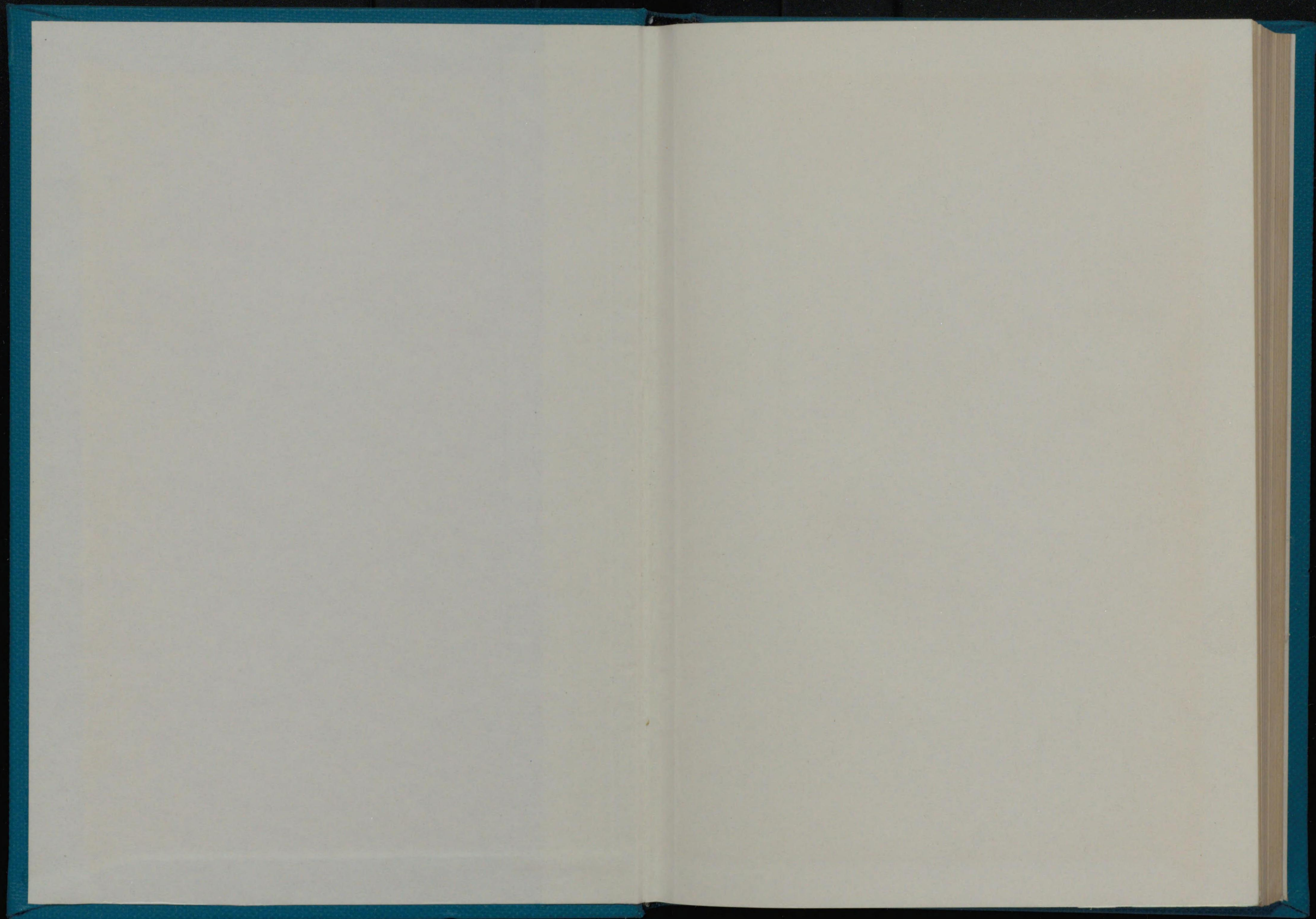
定 價 一 圓

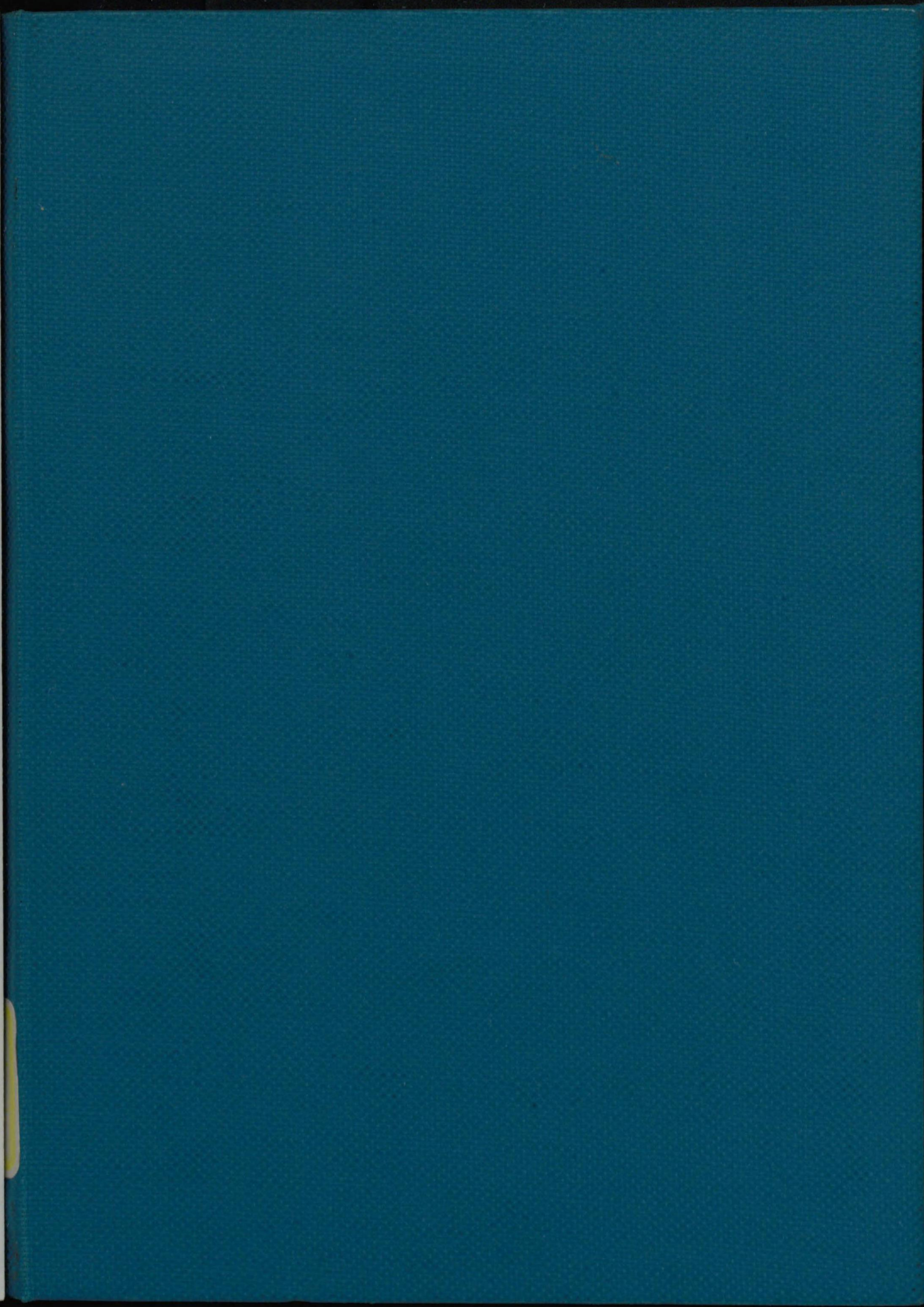
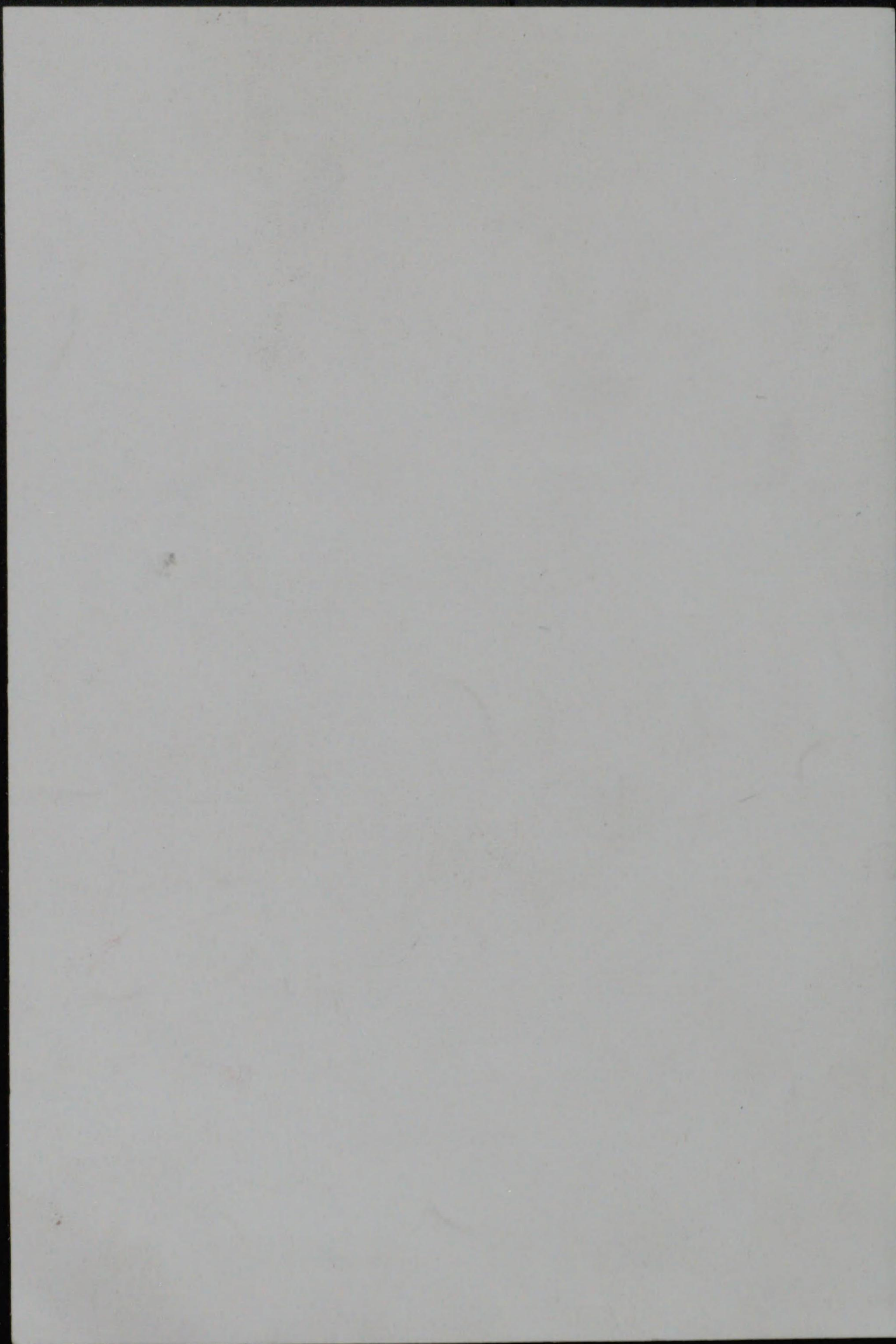
送料六錢

著者は、日支事變を契機として、短歌に至重なる基本變化が徐々に起りつゝあるのを確認する。我國の生活現實全部面に大きな歴史的動きが日夜進行しつゝあるからだ。この動きこの風貌を、われわれの血肉を通して、いきくと巨細、眞實に、短歌に表現することはこの現代に生れあつたわれ々の歡喜であらう。しかもかゝる短歌による表現の勉強を念々積みかさねてのみ可能だ。本増訂版がその根本指針となれば幸ひである。
(はしがきより)

三 省 堂 刊





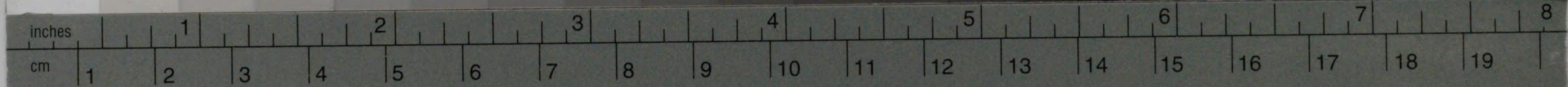


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

